
あなたしか見えないの…

EMI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたしか見えないの：

【Nコード】

N8038P

【作者名】

EMI

【あらすじ】

目の見えない盲目なOLと大手企業に勤める主人公。
社会人2人の幸せなカップルだが
毎日平和な生活をしていたある日、
主人公の会社に若い女が入ってきて、主人公を好きになる。
そして様々な嫌がらせをして行く…

いつもと変わらぬ日々

— — — — —

俺が悪いのか…

俺は悪い事をしたのか…

どうして死んだんだ？

指輪だって買ってた…

君を愛していた…いや

今でも愛しているのに…

2

「翼くん！！！！待たせてごめんね！！！」

向こうから点字ブロックを探しながら少し早足で歩いてくる女の子…

俺の彼女だ。

「ゆうこ！！！！危ないよ！！もっとゆっくり歩けよ」

「平気平気♪慣れてるからね」

彼女は目が見えない。

つまり盲目だ。

彼女は美人だ。

そして何より優しい。

今日もいつもの仕事帰りのスーツ姿。

何故か一段ときれいに見える。

俺は車から降りて

彼女の肩をスツと支えた。

「わー！！びっくりしたー！！今日は早く終われたよー！！

なんか主任が気前よくてさ、

昼の3時にあがらせてもらえるなんて幸せだー♪」

仕事の事をにこにこしながら話す彼女を見て

俺はいつもほっとする。

「仕事、上手くいってるんだな」

少しビックリしながら

彼女は笑顔で頷いた。

彼女の仕事はクレームを承る事務だ。

時々泣きながら家に来たり

誉められた事を話してくる。

俺はというと、

大手企業の企画係に勤めている。

自分でいうのはなんだが

そこそこいい給料を貰っている。

「あ、昨日パウンドケーキ作ってたんだー！！あげるよ♪」

彼女は手作りが好きで
いつも甘い物をいっぱいくれたり
お弁当袋も彼女お手製のものだ。
甘い物に関しては

俺の会社の友達にも作ってくれたりする。

「おうありがとう！！めっちゃうまそー」

車に乗り、腹が減っていた俺はさっそく一口食べた。

「うんめー！！とってもおいしいよ」

そういういつも彼女は幸せそうな顔をする。

「いつもありがとな。」

頭をくしゃくしゃすると

彼女はいつも俺の手を止めて
物欲しそうな顔をする。

「あゝはいはい（笑）」

そうして俺は彼女の柔らかい唇にキスをする。

いつもと変わらない

変わらない時こそが特別だ。俺はいつもそう思い毎日を生きている。

「あのね：私翼くんが好き。」

俺は少し驚いた。

「え、どうしたの急に？」

「いつも私が作る物

美味しいって言ってくれるし

身につけてくれる。

すごく嬉しいの：」

素直に言う事はいい事だけど

すぐく照れくさい事だ。

それを素直に照れくさそうに言う彼女。

俺の彼女だ。

正直、可愛くて可愛くて仕方ない。

目の見えない彼女だから

ふいにキスをする

ビックリするらしく

だから怒る。

でもそれが少し楽しくて

いたずらをよくする。

今日もいたずらをした。

「!?!?」

可愛くて…可愛くて…

もっと深いキスをする。

「……………」

可愛い…止められなくなりそうだが
昼間の車はマズいだろ。
そう思い唇から離れた。

案の定彼女は少しムツとしていた。

「もー！！ビックリするでしょ！！」

怒った顔もまた可愛い。

「はいはい、ごめんごめん」

適当に謝る俺が更に彼女を怒らせる。

「ほんとに謝る気あるのー！？もー！！だいたい翼くんはいつもそうなんだから！！この間だってー…」

目は見えないが口はよく動く。

そのまま彼女の説教を聞きながら
車を発進させた。

— — — — —

「着いたぞ」

「Z Z Z」

「て、寝てるし」

仕事で疲れたのか：

それとも喋りすぎたのか

よく分からないが

とりあえず疲れてるらしい。

「しゃあーねーな」

少しため息をついて

ゆうこを抱き俺の家へ入った。

「ムニャムニャ…」

「幸せなやつ」

俺は可愛い寝顔を見つつ

パソコンを触り仕事の続きをした。

— — — — —

「……あれ？私寝てた？」

まだまだ眠たそうな彼女が目を覚ました。

「うん」

「そっけない返事ー」

頬を膨らましていつも言われるセリフだ。

俺はそっけないのかな？

その度に考える。

「え、もう7時！！」

夕飯の支度しなきゃ！！」

そう言って馴れた手つきでエプロンを手にとり
まるで見えているように

包丁を手にとり野菜を切る。

冷蔵庫の中も把握しているらしい。

因みにここは俺の家だ。

高校時代（前書き）

彼女と付き合って約5年：

ゆうこは記念日を覚えているらしく

毎回ケーキを焼いたり

お揃いの物を手作りする。

俺はというと：

実際何も覚えていない。

だからまた怒られる。

高校時代から付き合っているのだから
忘れても無理はないと思うが：

「そういえば…」と高校時代を振り返ってみる。

毎日バスケに明け暮れていてガールフレンドの存在なんて
まったく気にしていなかった。

：まあエロ本には多少興味はあったが：

と、話は戻り、

本当に意識していない日々が続いていた。

しかし高2の冬に大親友の勇気に彼女ができた。
クリスマスはなんだかんだそいつと居て当たり前だったんだが

急に『あゝごめん!! クリスマスは彼女と過ごすわ』なんて言われて俺は目を丸くした。

いつのまに出来たんだろうか…

どうして言ってくれなかったんだろうか…

色々考えたが、大雑把な俺はすぐに考えるのに飽きてしまった。

しかし今考えるとその頃からだった。俺が女の子に…いや、ゆうこに意識しだしたのは…

俺達は高校に入って同じクラスになり初めて盲目の女の子の存在を知った。そして席も運よく前後だった

彼女を好奇の目で見る奴もいたし美人な彼女をひがむ女子もいた。ゆうこはイジメられていた。

後々本人から聞いた所、目が見えないという理由からではないらしい。

当時とてもちやほやされていた彼女は、周りの男子にかける言葉もなくただただ微笑んでいた。

それは俺もよく覚えている。

正直彼女の印象はモナリザだった。
つまり微笑んでいる印象しかなかったのだ。

それが女子からすれば
八方美人にでも見えたのだろう。

それからお弁当を独りで食べている彼女を発見した。

勇気とはクラスも離れていたし
弁当は別々に食ってたから
独りで食べる事が大半だった。

でも別に彼女と一緒に食べようとは思わなかった。

だけどきっかけが出来た。

彼女は弁当を食べるとすぐに
点字付きの本を読みはじめた。
彼女の席の後ろの俺は
そーっと覗きこんだ。

するとなんとその本は
俺の大好きな作家、市村 義宗の新しい文庫本だったのだ。

『あー!!その本!!』

興奮と共に出てしまった言葉だった。

俺は恥ずかしくて
口に手をあてた。

『…？その声は竹田くん？』

振り返った時の彼女の匂いは一生忘れないだろう。

高校時代

— — — — —

俺が悪いのか…

俺は悪い事をしたのか…

どうして死んだんだ？

指輪だって買ってた…

君を愛していた…いや
今でも愛しているのに…

「翼くん！！！！待たせてごめんね！！！」

向こうから点字ブロックを探しながら少し早足で歩いてくる女の子…

俺の彼女だ。

「ゆうこ！！！！危ないよ！！もっとゆっくり歩けよ」

「平気平気♪慣れてるからね」
彼女は目が見えない。

つまり盲目だ。

彼女は美人だ。

そして何より優しい。

今日もいつもの仕事帰りのスーツ姿。

何故か一段ときれいに見える。

俺は車から降りて

彼女の肩をスツと支えた。

「わ！！びっくりしたー！！今日は早く終われたよ！！
なんか主任が気前よくてさ、
昼の3時にあがらせてもらえるなんて幸せだー♪」

仕事の事をにこにこしながら話す彼女を見て
俺はいつもほっとする。

「仕事、上手くいってるんだな」

少しビックリしながら

彼女は笑顔で頷いた。

彼女の仕事はクレームを承る事務だ。

時々泣きながら家に来たり

誉められた事を話してくる。

俺はというと、

大手企業の企画係に勤めている。

自分でいうのはなんだが

そこそいい給料を貰っている。

「あ、昨日パウンドケーキ作ってたんだ！！あげるよ♪」

彼女は手作りが好きで
いつも甘い物をいっぱいくれたり
お弁当袋も彼女お手製のものだ。
甘い物に関しては

俺の会社の友達にも作ってくれたりする。

「おうありがとう！！めっちゃうまそー」

車に乗り、腹が減っていた俺はさっそく一口食べた。

「うんめー！！とってもおいしいよ」

そういういつも彼女は幸せそうな顔をする。

「いつもありがとな。」

頭をくしゃくしゃすると
彼女はいつも俺の手を止めて
物欲しそうな顔をする。

「あゝはいはい（笑）」

そうして俺は彼女の柔らかい唇にキスをする。

いつもと変わらない

変わらない時こそが特別だ。俺はいつもそう思い毎日を生きている。

「あのね：私翼くんが好き。」

俺は少し驚いた。

「え、どうしたの急に？」

「いつも私が作る物
美味しいって言ってくれるし
身につけてくれる。
すごく嬉しいの：」

素直に言う事はいい事だけど
すぐく照れくさい事だ。
それを素直に照れくさそうに言う彼女。

俺の彼女だ。

正直、可愛くて可愛くて仕方ない。

目の見えない彼女だから
ふいにキスをする
ビックリするらしく
だから怒る。

でもそれが少し楽しくて
いたずらをよくする。
今日もいたずらをした。

「!?!?」

可愛くて…可愛くて…

もっと深いキスをする。

「……………」

可愛い…止められなくなりそうだが
昼間の車はマズいだろ。
そう思い唇から離れた。

案の定彼女は少しムツとしていた。

「もー！！ビックリするでしょ！！」

怒った顔もまた可愛い。

「はいはい、ごめんごめん」

適当に謝る俺が更に彼女を怒らせる。

「ほんとに謝る気あるのー！？もー！！だいたい翼くんはいつもそうなんだから！！この間だってー…」

目は見えないが口はよく動く。

そのまま彼女の説教を聞きながら
車を発進させた。

— — — — —

「着いたぞ」

「Z Z Z」

「て、寝てるし」

仕事で疲れたのか：

それとも喋りすぎたのか

よく分からないが

とりあえず疲れてるらしい。

「しゃあーねーな」

少しため息をついて

ゆうこを抱き俺の家へ入った。

「ムニャムニャ…」

「幸せなやつ」

俺は可愛い寝顔を見つつ

パソコンを触り仕事の続きをした。

— — — — —

「……あれ？私寝てた？」

まだまだ眠たそうな彼女が目を覚ました。

「うん」

「そっけない返事ー」

頬を膨らましていつも言われるセリフだ。

俺はそっけないのかな？

その度に考える。

「え、もう7時!!」

夕飯の支度しなきゃ!!」

そう言って馴れた手つきでエプロンを手にとり
まるで見えているように

包丁を手にとり野菜を切る。

冷蔵庫の中も把握しているらしい。

因みにここは俺の家だ。

彼女と付き合って約5年…

ゆうこは記念日を覚えているらしく

毎回ケーキを焼いたり

お揃いの物を手作りする。

俺はというと：

実際何も覚えていない。

だからまた怒られる。

高校時代から付き合っているのだから
忘れても無理はないと思うが：

「そういえば：」と高校時代を振り返ってみる。

毎日バスケに明け暮れていてガールフレンドの存在なんて
まったく気にしていなかった。

：まあエロ本には多少興味はあったが：

と、話は戻り、

本当に意識していない日々が続いていた。

しかし高2の冬に大親友の勇気に彼女ができた。

クリスマスはなんだかんだそいつと居て当たり前だったんだが
急に『あゝごめん！！クリスマスは彼女と過ごすわ』なんて言われ
て俺は目を丸くした。

いつのまに出来たんだろうか：

どうして言ってくれなかったんだろうか：

色々考えたが、大雑把な俺はすぐに考えるのに飽きてしまった。

しかし今考えるとその頃からだった。俺が女の子に…いや、ゆうこに意識しだしたのは…

俺達は高校に入って同じクラスになり
初めて盲目の女の子の存在を知った。
そして席も運よく前後だった

彼女を好奇の目で見る奴もいたし美人な彼女をひがむ女子もいた。
ゆうこはイジメられていた。

後々本人から聞いた所、目が見えないという理由からではないらしい。

当時とてもちやほやされていた彼女は、
周りの男子にかける言葉もなく
ただただ微笑んでいた。

それは俺もよく覚えている。

正直彼女の印象はモナリザだった。
つまり微笑んでいる印象しかなかったのだ。

それが女子からすれば
八方美人にでも見えたのだろう。

それからお弁当を独りで食べている彼女を発見した。

勇気とはクラスも離れていたし
弁当は別々に食ってたから
独りで食べる事が大半だった。

でも別に彼女と一緒に食べようとは思わなかった。

だけどきっかけが出来た。

彼女は弁当を食べるとすぐに
点字付きの本を読みはじめた。
彼女の席の後ろの俺は
そーっと覗きこんだ。

するとなんとその本は

俺の大好きな作家、市村 義宗の新しい文庫本だったのだ。

『あ!! その本!!』

興奮と共に出てしまった言葉だった。

俺は恥ずかしくて
口に手をあてた。

『...? その声は竹田くん?』

振り返った時の彼女の匂いは一生忘れないだろう。

新人社員（前書き）

――――

「ねえ！！カレー出来たよ！！」

「んあ、ああ…」

「何？ボーっとして（笑）何考えてたの？」

「いや、べつに」

色々思い出していたら
カレーが出来たらしい。

確かに美味そうな匂いがしている。

「うわー！！うまそー！！いただきます」

とっても美味しいカレーを平らげ

二人でテレビを見ていた。

最近、どのチャンネルをつけてもお笑い芸人がいる気がする。
でも実際面白いからいいと思う。

「ねーねー、明日仕事だし早く寝よー」

面白い番組がしてるって言うのに
いつも11時になるとだだをこねてくる。

「あー、わかったわかった」

ベッドに入るといつもドキドキする。

男の本能なのかやりたい気持ちが溢れ出てくる。

だけど疲れているだろうと思い、いつも何もしない。

そこは我ながら偉いと思う。

「Z Z Z」

「あれだけ寝ながらよくまだ眠れるなー」

なんて独り言を言いながら

ゆうこに触りたいという気持ちと戦っている。

サラサラの髪、長い睫毛、ピンクの柔らかそうな唇、小さな手、白
い肌、細い足…

何もかもが俺にとっては媚薬のようだとまらなくなる。

そんな時は…

「…早く寝よう」

それが一番だ。

新入社員

———

俺が悪いのか…

俺は悪い事をしたのか…

どうして死んだんだ？

指輪だって買ってた…

君を愛していた…いや
今でも愛しているのに…

「翼くん！！！！待たせてごめんね！！！」

向こうから点字ブロックを探しながら少し早足で歩いてくる女の子…

俺の彼女だ。

「ゆうこ！！！！危ないよ！！もっとゆっくり歩けよ」

「平気平気♪慣れてるからね」

彼女は目が見えない。

つまり盲目だ。

彼女は美人だ。

そして何より優しい。

今日もいつもの仕事帰りのスーツ姿。

何故か一段ときれいに見える。

俺は車から降りて

彼女の肩をスツと支えた。

「わ！！びっくりしたー！！今日は早く終われたよ！！
なんか主任が気前よくてさ、
昼の3時にあがらせてもらえるなんて幸せだー♪」

仕事の事をにこにこしながら話す彼女を見て
俺はいつもほっとする。

「仕事、上手くいってるんだな」

少しビックリしながら

彼女は笑顔で頷いた。

彼女の仕事はクレームを承る事務だ。

時々泣きながら家に来たり

誉められた事を話してくる。

俺はというと、

大手企業の企画係に勤めている。

自分でいうのはなんだが

そこそこいい給料を貰っている。

「あ、昨日パウンドケーキ作ってたんだ！！あげるよ♪」

彼女は手作りが好きで

いつも甘い物をいっぱいくれたり

お弁当袋も彼女お手製のものだ。

甘い物に関しては

俺の会社の友達にも作ってくれたりする。

「おうありがとう！！めっちゃうまそー」

車に乗り、腹が減っていた俺はさっそく一口食べた。

「うんめー！！とってもおいしいよ」

そういういつも彼女は幸せそうな顔をする。

「いつもありがとな。」

頭をくしゃくしゃすると

彼女はいつも俺の手を止めて

物欲しそうな顔をする。

「あゝはいはい（笑）」

そうして俺は彼女の柔らかい唇にキスをする。

いつもと変わらない

変わらない時こそが特別だ。俺はいつもそう思い毎日を生きている。

「あのね：私翼くんが好き。」

俺は少し驚いた。

「え、どうしたの急に？」

「いつも私が作る物

美味しいって言ってくれるし

身につけてくれる。

すごく嬉しいの：」

素直に言う事はいい事だけど

すぐく照れくさい事だ。

それを素直に照れくさそうに言う彼女。

俺の彼女だ。

正直、可愛くて可愛くて仕方ない。

目の見えない彼女だから

ふいにキスをする

ビックリするらしく

だから怒る。

でもそれが少し楽しくて

いたずらをよくする。

今日もいたずらをした。

「!?!?」

可愛くて…可愛くて…

もっと深いキスをする。

「……………」

可愛い…止められなくなりそうだが
昼間の車はマズいだろ。
そう思い唇から離れた。

案の定彼女は少しムツとしていた。

「もー！！ビックリするでしょ！！」

怒った顔もまた可愛い。

「はいはい、ごめんごめん」

適当に謝る俺が更に彼女を怒らせる。

「ほんとに謝る気あるのー！？もー！！だいたい翼くんはいつもそうなんだから！！この間だってー…」

目は見えないが口はよく動く。

そのまま彼女の説教を聞きながら
車を発進させた。

— — — — —

「着いたぞ」

「Z Z Z」

「て、寝てるし」

仕事で疲れたのか：

それとも喋りすぎたのか

よく分からないが

とりあえず疲れてるらしい。

「しゃあーねーな」

少しため息をついて

ゆうこを抱き俺の家へ入った。

「ムニャムニャ…」

「幸せなやつ」

俺は可愛い寝顔を見つつ

パソコンを触り仕事の続きをした。

— — — — —

「……あれ？私寝てた？」

まだまだ眠たそうな彼女が目を覚ました。

「うん」

「そっけない返事ー」

頬を膨らましていつも言われるセリフだ。

俺はそっけないのかな？

その度に考える。

「え、もう7時!!」

夕飯の支度しなきゃ!!」

そう言って馴れた手つきでエプロンを手にとり
まるで見えているように

包丁を手にとり野菜を切る。

冷蔵庫の中も把握しているらしい。

因みにここは俺の家だ。

彼女と付き合って約5年…

ゆうこは記念日を覚えているらしく

毎回ケーキを焼いたり

お揃いの物を手作りする。

俺はというと：

実際何も覚えていない。

だからまた怒られる。

高校時代から付き合っているのだから
忘れても無理はないと思うが：

「そういえば：」と高校時代を振り返ってみる。

毎日バスケットに明け暮れていてガールフレンドの存在なんて
まったく気にしていなかった。

：まあエロ本には多少興味はあったが：

と、話は戻り、

本当に意識していない日々が続いていた。

しかし高2の冬に大親友の勇気に彼女ができた。

クリスマスはなんだかんだそいつと居て当たり前だったんだが
急に『あゝごめん！！クリスマスは彼女と過ごすわ』なんて言われ
て俺は目を丸くした。

いつのまに出来たんだろうか：

どうして言ってくれなかったんだろうか：

色々考えたが、大雑把な俺はすぐに考えるのに飽きてしまった。

しかし今考えるとその頃からだった。俺が女の子に…いや、ゆうこに意識しだしたのは…

俺達は高校に入って同じクラスになり
初めて盲目の女の子の存在を知った。
そして席も運よく前後だった

彼女を好奇の目で見る奴もいたし美人な彼女をひがむ女子もいた。
ゆうこはイジメられていた。

後々本人から聞いた所、目が見えないという理由からではないらしい。

当時とてもちやほやされていた彼女は、
周りの男子にかける言葉もなく
ただただ微笑んでいた。

それは俺もよく覚えている。

正直彼女の印象はモナリザだった。
つまり微笑んでいる印象しかなかったのだ。

それが女子からすれば
八方美人にでも見えたのだろう。

それからお弁当を独りで食べている彼女を発見した。

勇気とはクラスも離れていたし
弁当は別々に食ってたから
独りで食べる事が大半だった。

でも別に彼女と一緒に食べようとは思わなかった。

だけどきっかけが出来た。

彼女は弁当を食べるとすぐに
点字付きの本を読みはじめた。
彼女の席の後ろの俺は
そーっと覗きこんだ。

するとなんとその本は

俺の大好きな作家、市村 義宗の新しい文庫本だったのだ。

『あ!! その本!!』

興奮と共に出てしまった言葉だった。

俺は恥ずかしくて
口に手をあてた。

『...? その声は竹田くん?』

振り返った時の彼女の匂いは一生忘れないだろう。

綺麗なサラサラの髪の毛に
柔らかなようなピンクの唇。

美人だ：

ふいにそう思った。

『この本：知ってるの？』

少し警戒心があるような声だった。

話すのは初めてだった。

そして俺は平静を装った。

『う、うん。その本の作家のファンなんだ。』

今思えば、声は裏返りそうだったし生唾を何回も飲み込んだし
それはそれは平静なんて装えてなかった。

『：この壁は我の心の壁。』

いきなり市村 義宗著書の【希望谷】の一節を言ってきたので思わず
続きを返した。

『壁が大きく見える：そうかまだ私はこんな小さかったのか』

そう言う

彼女の表情はパァッと明るくなり体を後ろに向けて俺と真っ正面に座った。

『すごいすごい!!!市村 義宗のファンがこんな近くに!!!実は私もすごいファンなんだ!!!とくにあの作品とか!!!』

弾丸のようにお喋りな彼女は
なんだか思っていた印象とは違い
違う一面を見れた気がした。

喋るだけ喋った後
彼女は少しマズい顔をした。

『あ……うざい……よね?初対面でこんな話されちゃ……』

『え?なんで?もっと聞かせてよ。』

その俺の素直な一言で
彼女はまた表情が一段と明るくなり
恐る恐る話しだした。

帰り道、

俺は例の勇気の彼女と勇気が一緒に帰るのを見た。

幸せそうだった。

付き合うつてどんな事なんだろうか……

そんな事をぼんやり考えながら歩いていると

僕の横を点字ブロックを探しながら歩く女の子が通った。

『…園田さん？』

彼女はくるっと振り返り

『あ！！その声は竹田くん！！』

嬉しそうな表情を浮かべた。

僕の柔らかい心はその笑顔で和んだが
僕の硬い心は苦しんでいた。

彼女は俺が見えない。

当たり前の事がこの時分かった。…と言うより気づいた。

『一緒に帰ろうよ♪』

『…うん』

好きな作家の話をした。
俺の部活の話をした。

彼女の生い立ちの話をした。
好きな食べ物の話をした。

とても楽しかった。

この時から僕が彼女に対する印象はガラッと変わっていた。

清楚なお姫様から一転、お喋りな小悪魔
そんな風に思っていた。

その日から数日たった時には
もう仲のいい友達になっていた。

そして高校3年になり
部活も引退し、俺はバスケの道を行くか名門大学へ進学するか迷っていた。

『翼くん!!これ重いよ〜持って〜!!!』

大量の進路希望調査票を持っている彼女が俺の声を認識し声をかけた。

眠たかったせいとかあくびが出た。
ノロノロ近づいて行き
ひょいと荷物をもった。

『はいはい。お嬢様。』

こういうと彼女はいつも怒った。

『あ、またそんな言い方!!
だいたいねー、か弱い女の子がこんな物持ってたら飛んでくるのが
男ってもんでしょ!!』

『あーうるせー』

『何よまたそんな言い方してー!!!!』
するとクラスの男子がからかいにきた。

『ヒュー朝から夫婦喧嘩かよ!!』

他の男子とはあまり話さない彼女だったので
俺とゆうこは付き合っているという噂が学校中に広がっていた。

『そーだよ悪いかぼけー』

いつも言い返すのが面倒だったので棒読みで十分。

ゆうこはというと

そういう事を言われるとモナリザスマイルを振りまいた。

ゆうこはどう思っているんだろうか…

次第に俺はゆうこの存在が気になって仕方なくなってきたのだ。

実験室にその調査票を置かなくてはいけないらしく
なんだか危なっかしいので
俺とゆうこは二人で実験室へ向かった。

ゆうこに曰わく重たい調査票を軽々と実験室のテーブルに置いた。

『ありがとね!! 今度また何か作ってきてあげる♪』

この時からゆうこは

俺が甘党だと知り毎日のようにお菓子を作ってきていた。

『お、期待してよーっと。』

手を後頭部にあて、いつもの感じで実験室を出ようとした時

『あ、まって!!』

ゆうこが呼び止めた。

『ん? どした?』

ゆうこの表情を見た時何かいつもと違う雰囲気を感じた。

実験室のドアを閉め直し

ゆうこに近づいた。

『どしたん?』

『…進路どうするの?』

ゆうこは泣きそうだった。

『…いや、実際の所迷ってる。』

『じゃ、じゃあさ!!』

私もその名門大学希望してるから
一緒に行こうよ!! バスケットじゃなくてさ!!』

必死なのが伝わった。

でも俺はまだバスケの道も輝いて見えていた。

『ん…。俺はさ、やっぱりバスケットも好きなんだ。だから今そんな風にキツパリは決められない。』

『な!! 現実さ、もっと厳しいんだよ!?! 将来の事考えると絶対名門校に行くべきだよ!!』

』
目に涙が溜まっているのが見えた。

『な、なんでそんなにお前が必死になるんだよ…』

とっさに出た素直な疑問だった。

すると驚きの答えが返ってきた。

『…きだからだよ。翼くんが好きだからだよ!!!!!!!!』

啞然とした。

頭が真っ白になった。

それでも彼女はまた話しだした。

『…気づかなかった？

ずっと好きだったの…

翼くんは…私の事…好き…ですか？』

消え入りそうな声だった。

少し震えていた。

俺は平静を取り戻し

震えている肩を覆うように

そっと彼女を抱いた。

『うん…。好き。』

精一杯の答えだった。

心臓が破裂するんじゃないかと心配したくらいだ。

『…私でいいの？』

意外な質問だった。

むしろ俺がしたい質問だったのに。

『こっちのセリフ』

クスクス笑う彼女。

それから曖昧で終わってしまった実験室での出来事。

付き合ったのか彼女なのか分からないうやむやな日々が続く卒業式、俺は彼女に告白をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8038p/>

あなたしか見えないの…

2011年1月3日22時51分発行